

## 尾北高校

# 「東京ローズ 私の言葉に翼が生えて」

2018. 12. 23 上演2

この劇は、戦時中の東京にあるラジオ局のスタジオを舞台に、アナウンサーの洋子と二人の日系アメリカ人との友情や思い出、そして戦争の恐ろしさを「言葉」や「手紙」を主なテーマに表現したものだ。

幕が上がると同時に目に飛び込んできたのは舞台セットだった。舞台中央には高さ2mのバウムクーヘンを四等分にした両サイドに階段をつけたような不思議な形状の台がそびえ立ち、その側面にはしっかり開閉の出来る扉があり、スタジオの出入り口となっていた。階段の上の空間は、兵士たちの奮闘している戦場として、照明とも相まって全く別の空間を表現していた。

キャストの衣装や口調、声のトーンなどで3人の女性の性格や文化の違いというのが驚くほど自然に伝わってきた。戦地で聴いている兵士たちに向けてラジオで想いを伝えていくうちに心を開き始める洋子と、最初はトゲトゲしていたものの、柔軟な考え方で兵士の心をつかむエリーザの2人の演技は同じ高校生には思えないほどリアルでとても引き込まれた。日本人アナウンサーによる絶妙に音質の悪く圧迫的な口調での放送や当時の重苦しい音楽など、耳から入ってくる情報だけでも十分に時代背景を感じ取る事ができた。

序盤にこまめに出てきたリスナーの兵士たちの何気ない会話が、後半にはピタッと無くなった演出には、日本が不利な状況になり、ラジオを聴く暇が無くなったのか、それとも戦死してしまったのか、はたまた規則が厳しくなり聴けなくなってしまったのか、などと想像が膨らんだ。これまでのラジオから形式をがらっと変え、兵士たちに受け入れられ始める東京ローズを作り出した立役者のエリーザの「ラジオパーソナリティは言葉に羽を生やして飛ばす仕事」という表現は、観客にもとても分かりやすく、またこの劇のテーマの一つとしてとても心に残った。

旦那さんの死を受け、続々と本音が飛び出し、孤独を感じて「私には、もうラジオしか残っていないの。」と苦しむ洋子との別れを決心したエリーザと、情にもろく洋子の元に残ることに決めたベティの3人の友情は簡単に崩れるようなものではないと伝わってきた。洋子を放っておけないベティの「洋子さんは!私の戦友です!!」という台詞から、直接戦場に行ってはいるものの、自分たちや周りの人たちの声に翼を生やして世界中へ飛ばすという使命のもと、日本で戦ってきた仲間意識のようなものが感じられた。東京大空襲で死んでしまった洋子の念が海を越えてエリーザに届いていたという場面でも、3人で戦ってきた思い出や絆が舞台からあふれ出ている。

ベティが海に向かって両親に向けた言葉に羽を生やして飛ばした生存確認は、きっと海を越えて、伝えたい人たちに届いているような気がした。死んだはずの洋子が英語で言った「東京ローズはGHQによって逮捕された」という台詞には、戦争に抗議を続ける3人の平和への願いが込められているように感じられた。